
無言のきみと毒舌の君

Retruner

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無言のきみと毒舌の君

【Zマーク】

Z3287C

【作者名】

Retrunner

【あらすじ】

誰に対しても、どんな時も無言のままの不思議な男の子と誰に対しても、どんな時も笑顔なのにある人に対してはやたらと毒を吐く男の子と剣道部大将の異常に強い女の子の物語。

無言のきみと毒舌の君

彼はいつも黙つたままだった。
理由はわからない。

決して話せないというわけではないだろう。

先生への返事や「はい」か「いいえ」で答えられる質問にははつきりと答えているのを見たことがある。

「あの」

でも、それだけ。本当に yes - noだけだった。

それ以上は誰に対しても絶対に言葉を発することは無かつた。

「聞いてますか？和音」

誰とも話をしない所為で大多数人間に嫌われ、多分友達なんて一人もいない。

まあ尤も少数の女の子からは「あの寡黙なところがカッコいい」と言われてそれなりに人気はあるのだけれど…何を隠そうわたしもその一人だつたりして…でへへ。

「でへへ、じゃありません（怒）」

「ふえいひゃんいらいひよ（静ちゃん痛いよ）」

にやけて緩んだほっぺたを横に思いつきり引っ張りながら笑顔で怒つて…いや、キレイにいらっしゃる。

わたしの向かい側で山積みのお弁当を一つずつ平らげていた自称他称男前の崎谷静はわたしが話を聞いていなかつたのがかなり頭にきているらしい。

この男、我が校随一の男前で、わたしが部長を務める剣道部の副部長もある。

そしてそのお陰でうちの部には女子部員が大量に集まり、その女子部員曰うての男子が入部してくるためかなりの大所帯となっている。でも不純な動機の塊と言つても過言ではない部活なので決して強くは無い。

「「めん。静ちゃん。なんの話だっけ？」

「ハア…明日の練習試合のメンバーの話ですよ」

ため息をついたので呆れているのかと思つていたけど眉がピクピク動いてるのを見るにまだ怒つてゐる。

静ちゃんはほとんど常に敬語を遣いほどんど常に笑顔で学校生活を過ごしているために誰にも気づかれていないけど実はかなり短気で喧嘩つ早くて毒舌家である。

「うちの部は男女関係無く実力主義だからね～。静ちゃんとわたしは確定としてあと三人はどうしようかねえ？」

「誰でも大差ないでしょ？…どうせ僕らには回ってこないでしちゃうから」

「そりなんだよね…面倒な伝統だよね、全く」

この高校の部活にはそれぞれ初代のメンバーが創つた伝統がある。例えばサッカー部はキーパー以外は試合以外でボールに手で触れてはならない、茶道部は気に入らない人間以外にはいつでも無料で茶と菓子を振舞うこと、などがある。

そして剣道部は「練習試合及び公式戦出場時は完全な実力主義で先鋒から大将までを並べること」である。

その伝統のお陰で今まで一度も試合に出場できたことが無い。

とりあえず部内では敵無しで、大将に就いてはいても自分が井の中の蛙なんぢやないかと常に他の高校の生徒に対する劣等感をもつてしまふ。

幼いときからいつも一緒に剣術の練習をしてきた静ちゃん曰く「今 の和音なら人間には負けないでしょ？」だそうだ。

じゃあわたしとほとんど互角にやり合つてる静ちゃんは何なのさ。

「まあいいや。順当にいって…加藤さん・佐藤さん・伊藤くんの人でいいよね？」

「問題ないでしょ。それより和音？先ほどまた広瀬くんのことを考えていましたね？」

「バレてた？」

「彼のこと意外で和音があれほど気味の悪い顔をしてこるといふのをみたことがありませんでしたから推測に過ぎませんが…」

「そう言っていやけるあたり本当に性格が悪い。広瀬くんのことになると二つもの2割り増しくらい性格の悪さに拍車がかかる。

どうやら静ちゃんは広瀬くんが嫌いらしい。

以前彼こと広瀬保くんが剣道部に所属していた時に静ちゃんが打ち合いで初めてわたし以外の人に負かされ、そのリベンジのために影でかなり努力していたのに広瀬くんが突然退部してしまったから結局再戦を果たせないまま勝ち逃げされてしまいそのことを今でも恨んでいるらしい。

その打ち合にはすさまじいものだつたらしいのだけどわたしはそのまま欠席していく見ることができなかつた。

「広瀬くんの話はもういこから。早くお弁当食べちゃいな

「わかつてますよ」

照れて田をそらして窓越しに空を見上げながら話題をそらした。
空はじこまでも青くてまるで静ちゃんの瞳みたいだなあなんて思いながらこつまでも眺めていた。

……明日は試合したいな……

迷惑な伝統と迷惑な挑戦

彼は毎回そうだった。

わたし達が練習試合とか公式戦をする度に遠くからその試合を眺めていた。

わたしは彼が見ている内にいいところを見せようと張り切ったこともあつたけど今ではもう諦めた。

完全な実力主義のうちの部は公式戦では先の三人が見事に三連敗してくれるお陰で副将と大将に試合が回ってくることはまず無くて、それなら練習試合で、と思つたけどその考えは甘かった。

うちの部は近年まれに見る弱小剣道部で練習試合を申し込んでも断られ、申し込んでも確実に断られる。

そんな中一校だけが試合に応じてくれるんだけどその高校の剣道部の監督がうちの剣道部のOBでこの人は試合形式を公式戦と同じ三勝制にするもんだから結局試合には出られずじまい…

一度うちの監督に試合形式の変更を求める抗議をしたけどうちの監督はOBの大学の後輩らしくて逆らえないのだそうだ。

じゃあ個人戦、と思って監督に話をしたら「俺は個人プレーは嫌いだ」と言われ遣えなく却下となつた。

「何このハ方塞がり具合。集団イジメ？」

「突然叫びださないでください。負けた三人が虎に睨まれた蛙のようになつていますよ」

どうやら勢いあまつて叫んでいたらしい。

武道場全体がかなり引いた空気になつちゃつたけど、すぐさま何事も無かつたかのようにもとのざわざわ感を取り戻した。

「「めんね。あんた達を責めてるわけじゃないから安心して。それより静ちゃん、虎つてなにさ?」

「僕は見たままを忠実に形容しただけですよ」

「だからって虎なんて…」

すぐさま反論しようとしたけど横田に負けた三人が大きくなづいているのを見て止めて、三人に一発ずつテロップをお見舞いしてやつた。

「今日はもう終わり。着替えて早く帰りな」

「今日は少し用事があるので僕は先に帰りますよ、和音」

「ん、わかった。お疲れさん」

試合後の片付けを終えて帰ろうと思つてふと観戦席に田をやると…なんと広瀬くんが眠つていた。

たしかに面白くない試合だつたけど…寝る？普通。

起こしたほうがいいよね？もうここに閉めなきやだめだし。

そつと近づいてこき、肩をゆすって起しますと広瀬くんはゆっくつと体を起こした。

「おはようございます」

「お、おはようございます…って喋つた

「そりや話すよ。人間だから」

ヤバイ。

感動してちょっと泣けてきたよ。

「試合、またできなかつたね」

また、つてまさかいつも見ててくれたのはわたし？なんて自惚れちやつたりしたりなんかしてみたり…

「ねえ、俺と打ち合ひしない？俺に勝つたら一つだけ何でもゆーこと聞くよ」

「やる。やります」

「俺は負けたらきみの命令を絶対に実行する。で、俺に向してほしいの？」

なんでもって言わると結構悩むね。
まあいいや。

前からずっと聞きたかったことを教えてもらおう。

「広瀬くんがなんで全く話さないのかを教えて」

「りょーかい」

彼はそう言って以前彼が使っていた木刀を取り、試合場へと歩を進めた。

木刀でやるの？

しかもあの様子じゃ防具は無しだらうね…

「きみさあ、昔からやつてたのつて剣道じゃなくて剣術でしょ？きみはきみの流派でやつてくれていいから」

試合したいとは言つたけどまさかこんな形で願いがかなうとは全くもつて思つて無かつたよ。

せめて彼が怪我をしないことを祈るばかりだよ…

無言? のきみと翻れた木刀

彼はいつもそうだった。

いつも無表情でそつけなくてつまらなそうだった。

一部の女の子達にはその表情が真剣な表情をしているように見える
らしいけどわたしにはそつは思えなかつた。

どうやらわたしの考えは間違つていなかつたらしい。

目の前にいる彼は今まで見たこともないくらいまつすぐな目でわた
しを見据えていた。

その眼差しに殺氣が含まれてなければ飛び跳ねて喜んでるといふだ
けど…目の前の彼から向けられている殺氣は尋常じやなかつた。

「本気で来い」

彼はそう言つなり素早く踏み込みわたしのど元に突きを放つた。
女の子相手に容赦なしですか…

構えた木刀をそのまま横に振りつて軌道を逸らしてかわし、後ろに
跳んで距離をとつた。

それなりに速い突きだけど静ちゃんが負けるほど強いとは思えない
んだけど。

この程度の実力なら怪我させずに十分勝てる。

一気に下がつた分の距離を詰め、面を狙つて木刀を振り下ろした。
彼は間一髪で受け止めた。

そりやそうだスピードを加減したんだから。

面を止められた状態からさらに間合いを詰め、柄の先で顎を打つた。
そしてバランスを崩したところで木刀を放り、服の襟と袖を掴んで
背負い投げた。

彼は呆気にとられていたけど、うちの流派でいって言つたのは彼
なんだし問題ないよね。

「まさか背負いがくるとは…しかもこんなに短い試合時間で負ける
なんて」

「！」の程度でよく静ちゃんに良く勝てたね

「ド直球だね」

だつて信じられないし。

静ちゃんなら問題なく勝てると思つんだけど…

「きみの実力を自覚なしに引き出したからだよ。その証拠にきみ、かなり手加減してただろうけど…この木刀見てみ」

彼がわたしに放り投げた木刀は見事にヒビが走っていた。確かに手加減してちゃこうはならないよね…

「ん？でも自覚なしつてど～ゆ～こと？」

「俺がほとんど話さない理由はそれに関係することなんだよねいや～意味が全くわからない。

あまり頭のよろしくないわたしにもわかるように説明してください。「まあ説明するよりも実際に見た方が早いと思つよ。打ち合いの前に言つたよね？負けたら君の命令を絶対に実行するつて。それを違えようとすると…」

彼はそう言つとわたしが立つている所から十数メートルほど離れたところで立ち止まり、突然何もないところへ向かつて体当たりを繰り出した。

ただ何もない空間に向かつて体当たりをするだけだったらわたしは迷わず帰つていたと思う。

誰でもそうしたと思う。

普通なら完全に頭のおかしな人にしか見えないと思つ。

でも彼の場合普通じゃなかつた。

確かに何もない空間に突つ込んだはずなのに何かに弾かれてわたしのところまですっ飛んできた。

「こんな感じで実行せざるを得なくなる」

転がつたまま「なはは」なんていいながら頭を照れくさうに搔いていた。

突然何の前触れもなくファンタジーの世界に引っ張り込まれたお陰で開いた口が塞がらず、ただただ彼の照れ笑いを眺めるしかなかつ

た。

わたしはどうしたらいいんだろう?

とりあえず笑っておこう。

今は頭が真っ白でそれ以外に何も思いつかない。

ハハハ…ハハ…ハア…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3287c/>

無言のきみと毒舌の君

2010年10月12日07時29分発行